

2

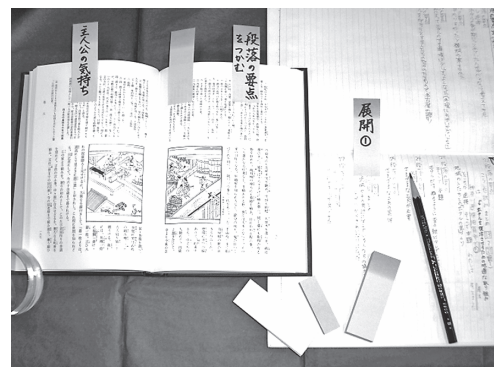
中学生の青木さんは、昔の人の考え方を知りたいと思い、次の文章を読みました。文章を読みながら青木さんは、手がかりになりそうな部分に傍線を引き、そこから読み取ったことを付箋（メモ）などを書いて、本や文書にはり付ける小さな紙）に書いて、本文の上にはっていききました。これらを読んで、あとの問いに答えなさい。

親子で馬盗人を追いかける話

今は昔のこと、河内（注1）かわちの国の前の国司で、源みなもとの頼信よりのぶの朝臣あそんという武士があつた。東国によい馬を持つ者がいると聞いて、ぜひとも所望（注2）したいと使いを出した。馬の持ち主も、相手が相手だけに断りかねて、その馬を進上（注3）したが、その馬を京まで連れて来る途中で、馬盗人がこれ目をつけた。見れば見るほどよい馬なので、何とか盗もうとあとをつつけ様子をうかがつたが、馬に付き添う武士たちが少しも油断を見せないで、とうとう道中では盗めずに、京までいっしょに来てしまった。馬は頼信の朝臣（注4）うまやの厩うまやにおさまつた。

この頼信の朝臣よりよしに頼義よりよしという息子があつたが、今日父親のところへ、東国から駿馬（注5）しゅんめがとどいた、と人から告げられて、考えるには、せっかく東国から来た馬を、つまらぬ奴やつが先にもらい受けるかもしれぬ。その前に自分が行つて、確かによい馬だったら、父にねだつて譲り受けた

参考
〈付箋をはった本やノート〉



（注1）河内（注1）かわち＝今の大阪府の東部。

（注2）所望（注2）＝（何が）欲しいと望むこと。

（注3）進上（注3）＝献上すること。差し上げること。

（注4）厩（注4）うまや＝馬を飼っておく小屋。

（注5）駿馬（注5）しゅんめ＝足の速い、すぐれた馬。

いものだ。こう思つて、親のもとへ出かけた。

雨が激しく降る日だったが、馬がほしい一心で、雨ぐらいは物ともせず、日の暮れがたに訪れると、父は、

「どうした、久しく来なかつたな？」

などと口にしたが、心の底では、東国から馬を連れて来たと聞いて、それがほしくてやって来たにちがいない、と見抜いたので、頼義が言い出さぬ先から、

「東国から馬を連れて来たそうだが、わたしはまだ見ておらぬ。持ち主はなかなかの良馬だと自慢しておる。今夜は暗くてわかるまいから、明朝見て、気に入ったら連れて行くがよい。」
と言つた。

頼義は、自分から切り出さぬ先にこう言われて、うれしくてならず、「では今夜はこちらに泊まつて、明朝その馬を見せていただきましょう。」
と言つて、泊まることにした。

宵のうちは互いに四方山(注6)の話などをして、やがて夜も更けたので父は寢所にはいつて寝た。頼義もそのそば(注7)に臥した。

いつまでも雨の音が小やみなく続いていたが、夜中過ぎに、この雨に紛れて、馬盗人がこの馬を厩から引き出して逃げた。その時、目ざとい者が、厩のほうで大声を上げて、

「盗人が昨日の馬を取つて逃げましたぞ。」

(注6) 四方山の話＝世間の様々な話。

(注7) 臥した＝横になった。

① 賊が入ったことを頼義に伝えずに厩に向かう頼信

② 頼義があとからついて来ると信じて、盗人を追いかけていく頼信

③ 自分の前には盗人を追う頼信がいると信じて、馬を走らせる頼義

と叫んだ。

頼信は雨音の中にその音をかすかに聞きつけると、寝ている頼義に①は、賊がはいったなどとは一言も告げずに、跳ね起きて、着物の裾をかいどり、矢筒^(注9)を背負って、厩にいつさんに走って行った。自分の馬を引き出し、その場にあつた鞍^(注10)を手当たりしだいにつけると、ただ一騎^(注11)、逢坂山^(注12)の方角へ賊のあとを追いかけた。心のうちで、この盗人は東国の者で、馬を盗もうとついて来たが、道中では隙^(注13)がなかったので、京に着いてから、この雨に紛れて取って逃げたものであろう、と考えていた。子の頼義も、人の呼び声を聞いて目を覚まし、父が考えたのと同じことを考え、昼まの装束^(注14)のまま丸寝^(注15)していたから、起きるやいなややはり矢筒を背負って、父のあとから厩に駆けつけると、やはり逢坂山の方角へ、ただ一騎馬を飛ばせて行った。

②父は、わが子が必ずやあとを追って来るだろう、と思っている。子は、父は必ず賊を追って、わが前においでだろう、と思い、おくれではならぬと馬を走らせて行くうちに、賀茂^(注16)の河原も過ぎた。雨もいつしかやみ、空も晴れてきたようなので、いよいよ馬を急がせると、やがて逢坂山にかかった。

馬盗人のほうは、その盗んだ馬に乗って、ここまで逃げて来ればまずだいじょうぶと安心して、逢坂山の麓^(注17)の小川の流れているところを、

(注8) かいどり＝(着物の裾を)手で持ってつまみ上げて。

(注9) 矢筒＝矢を納めておく筒。

(注10) 鞍＝人や荷物を乗せるために牛や馬の背に置く道具。

(注11) 逢坂山＝滋賀県大津市の南西にある山の名前。

(注12) 装束＝服装のこと。

(注13) 丸寝＝着物を着たままで寝ること。

(注14) 賀茂＝京都にある川の名前。

A 暗闇の中で、頼義が
いることを信じ盗人を
「射ろ」と命令する頼信

B

④ ああだった、こうだつ
たとは言わず寝てしま
う頼信

⑤ 取り返した馬を家来
たちに預けて寝てしま
う頼義

(注15) 並足で、水しぶきを立てながら歩かせて行つた。その水音を頼信は聞き
つけると、まるでこの場所で賊を討ちとめることに初めからきまつてで
もいたように、子の頼義が近くにいると見分けることもできない真つ
暗闇くらやみの中で、

「あれだ、射ろ。」

と一声。

B その一声がまだ終わりもしないうちに、弓音がした。手応えがあつ
た、と思うまもなく、馬の走る音、人の乗らぬ(注16) 銙あがみの音がからからと響
いたから、頼信がまた、

「盗人は射落としたぞ。急ぎ馬に追いついて引いて来い。」
と命じる。

そう命じたばかりで、頼義が馬を引いて来るのも待ちもせず、その場
から引き返したから、子の頼義は裸馬のあとを追いかけてその馬を取り
返し、帰路についた。家来たちはおくればせながら一人二人ずつ道を追
つて来たから、京の家に帰った時には総勢が二三十人にもなっていた。

④ 頼信は家に着くと、ああだった、こうだった、というようなことはい
つさい言わず、まだ夜も明けきっていないので、もとのように寢所には
いって寝てしまった。⑤ 子の頼義も、取り返した馬を家来たちに預けて、
これまた寝てしまった。

夜が明けて起きてからも、頼信は子に向かって、よくまあ馬を取られ

(注15) 並足＝馬の歩く速度で、
最もゆるやかなもの。

(注16) 銙＝鞍の両脇りょうわきに提げ、
騎者の足を踏みかける馬
具。

⑥ ほめる言葉を言わず、
ただ「その馬を引き出
せ」と言う頼義

⑦ 鞍のことにも触れず
に、ただ「ではいただき
ます」と言う頼義

⑥ なかった、じょうずに射たな、などということ(注17)は暖気にも出さず、
「その馬を引き出せ。」

とだけ言った。

引き出された馬を頼義が見ると、まったくよい馬だったので、

⑦ 「ではいただきます。」

と言って、もらい受けた。ただ、昨晚のところはそこまでの約束はなか
ったのに、りっぱな鞍まで置かせてあった。夜中に馬盗人を射止めた、
これは褒美(注18)というわけであろう。

この心構えは尋常(注18)でない。武士というのはこうした心構えを持ったも
のだ、という話である。

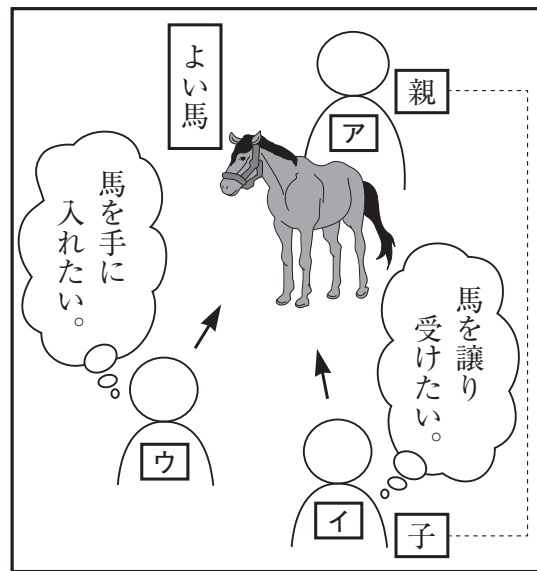
(福永武彦訳『今昔物語』卷二十五第十二話 による。)

(注17) 暖気にも出さず＝少しも
口に出して言わずに。

(注18) 尋常＝特に変わった点
はなく、普通であること。

一 青木さんは、登場人物を次の【図】のように整理しました。【図】のアからウに当てはまる人物の組み合わせとして最も適切なものを、次の1から4の中から一つ選びなさい。

【図】



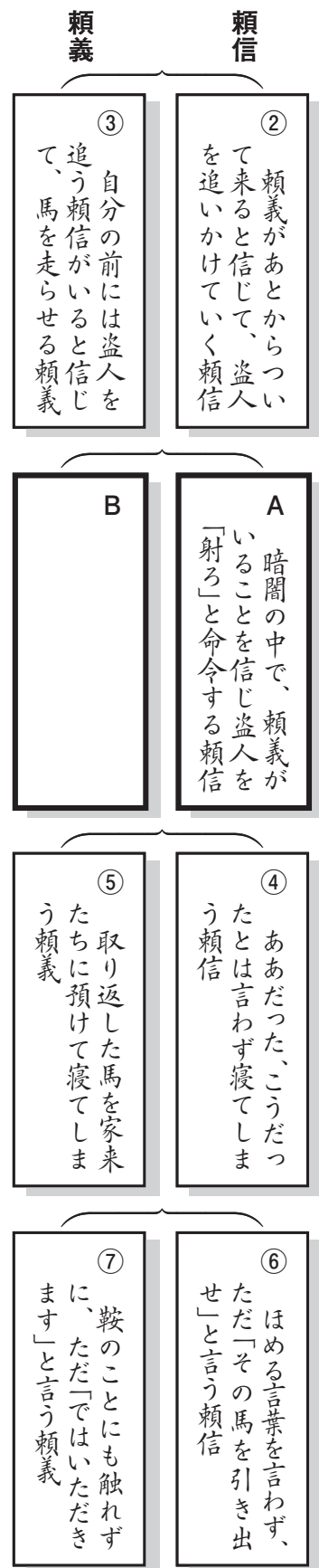
4	3	2	1
ア	ア	ア	ア
頼信	盗人	盗人	頼義
イ	イ	イ	イ
頼義	頼信	頼義	頼信
ウ	ウ	ウ	ウ
盗人	頼義	頼信	盗人

二 付箋①には次のように書かれています。なぜ頼信は賊が入ったことを頼義に知らせなかったのですか。その理由として最も適切なものを、次の1から4の中から一つ選びなさい。

① 賊が入ったことを頼義に伝えずに厩に向かう頼信

- 1 頼信は、頼義の力を借りなくても賊から馬を取り返せるだろうと思っていたから。
- 2 頼信は、頼義がきつと自分と同じように行動するにちがいないと思っていたから。
- 3 頼信は、頼義が疲れているだろうからゆっくり眠らせておこうと思っていたから。
- 4 頼信は、賊が入ったことにも気づかず寝ている頼義を頼りないと思っていたから。

三 青木さんがはった付箋を並べ直してみると、付箋②から付箋⑦は、次に示したように頼信と頼義の行動が対になっていることが分かります。これを参考にして、付箋Aと対になるように、付箋Bに当てはまる頼義の姿を、あとの条件1から条件3にしたがって書きなさい。



条件1 「頼義」で終わるように書くこと。

条件2 「命令」という言葉を使って書くこと。

条件3 二十五字以上、三十五字以内で書くこと。（文末の「頼義」の二字を含みません。）

四 青木さんは、頼信や頼義の行動や言葉に注目して、彼らが大切にしていると考えられることについて、四字熟語を用いてまとめを試みることにしました。あとの表の「油断大敵」の欄を参考にして、「以心伝心」と「不言実行」のどちらか一つを選んで上で、【あ】または【い】に当てはまる文章を、次の条件1から条件3にしたがって書きなさい。なお、読み返して文章を直したいときは、二本線で消したり行間に書き加えたりしてもかまいません。

条件3 八十字以上、百二十字以内で書くこと。

四字熟語		頼信や頼義の「行動や言葉」と「大切にしていること」
「油断大敵」 (意味…油断は失敗を招くもとであるから、大きな敵であること。)		頼義は、万が一の事態に備えて昼間の装束のまま父親の隣で寝ており、すぐに馬盗人を追いかけて、見事に馬を取り戻すことができた。このことから、頼義が大切にしていることは、「油断大敵」という言葉で表せると考えられる。
「以心伝心」 (意味…言葉にしなくても互いの思いが通じていること。)	【あ】	
「不言実行」 (意味…あれこれ言わずに、やるべきことを黙って実行すること。)	【い】	

[illegible]